

学部等	学科等	①大学・大学院の設置理念		②教員養成に対する理念・構想（大学、大学院）	
		①学科・専攻の設置理念		②教員養成に対する理念・構想（学科、専攻）	
③認定を受けようとする課程の設置趣旨（学科等/免許校種ごと）					
		①大学の「①設置理念」「②教員養成に対する理念・構想」	<p>成蹊学園創立者中村春二が目指した教育理念である「自発的精神の涵養と個性の発見伸長を目指す真の人間教育」を踏まえ、知育偏重ではなく、人格、学問、心身にバランスのとれた人間教育を実践し、確かな教養と豊かな人間性を兼ね備え、社会の発展のために献身的に貢献できる人材を輩出すること、学術の理論及び応用を教授研究し、自由な知の創造をはかり、もってその深奥を究めて文化の進展に寄与すること、地域社会に根ざしつつ、世界に開かれた教育・研究機関として、その成果を社会に還元することを通じて、人類の共存に寄与することを設置の理念とする。</p> <p>なお、成蹊学園では、2018年に成蹊学園サステナビリティ教育研究センターを設置するとともに、2019年には成蹊学園としてユネスコスクールの認定を受け、SDGsやESDの活動を推進することにより、大学のみならず併設する小学校、中学校及び高等学校とともに、文部科学省平成29年度告示小学校学習指導要領及び中学校指導要領の前文にも掲げられている「持続可能な社会の創り手」の育成に努めている。</p>	②教員養成に対する理念・構想	<p>本学は、「知育偏重ではなく人格、学問、心身にバランスのとれた人間教育の実践」を唱える学園創立者中村春二の教育理念を受け、“桃李”が人を惹きつけるように、世人が慕って自然と集まり従う、徳を備えた人物の育成を理想とし、「個性の尊重と人格陶冶による豊かな人間性の形成」という建学の精神を掲げて中等教育から出発した成蹊学園の伝統を受け継ぐ大学である。この理念・精神を成蹊教育の原点として学生一人ひとりの個性を尊重し育てることを大切にしてきた。大切に育てられた個性や人格陶冶による豊かな人間性は、視野の広い教養と高度の専門的知識・技能に裏打ちされていることも不可欠である。</p> <p>設置する文系4学部（経済学部・法学部・文学部・経営学部）と理工学部において、そうした願いの下に教養教育と専門教育に取り組んでいる。またこれら5学部が同一キャンパスにあることから、成蹊教養カリキュラムの授業やクラブ・サークル活動を通していろいろな価値観をもった学生同士の接触・交流が広がられており、お互いの個性を尊重し合う社会性を育てている。</p> <p>こうした理念・環境のなかで徐々に醸成される豊かな人間性と能力は、社会的要請である「豊かな人間性を持ち生徒を惹きつける個性的な魅力をもつ資質・力量の高い教員」という要件に合致したものにほかならない。本学はまさに社会の期待に応えられる教師を育て、送り出すための好適な条件を備えていると言って良いであろう。このような利点を大いに活かし、本学は「開放制教員養成制度」の趣旨に則って、教師としての責任感や愛情を育み、教職に関する深い教養と教育的技能を教授する課程を大学教育の一領域に位置付け、全学科・研究科における専門教育に応じた教科で、教職課程を構築することとした。広い視野を持ち、高度の専門的知識・技能、科学的探究精神を身につけ、理論的考察力においても実践的教育活動においても、生徒・保護者ばかりでなく、日本国民や世界の人の期待に応えて活躍できる教師を育成することを願うものであります。教育界に貢献できる教師を送り出すことは、大学としての社会的責任を果たすことになると考える。</p>
		①学科等の「①設置理念」「②教員養成に対する理念・構想」	<p>成蹊大学文学部は、文化現象の総合的理解とその継承を基本理念とし、この目標にもとづき、日本および諸外国の過去から現在に至る社会・文化の多様な様相を多角的な視点や方法によって分析・研究するとともに、ますます多様化し複雑化しつつある社会・文化の諸状況の中にあっても自己の主体性を失わず、「時代と社会の変化に柔軟に対応できる自立的な人間」を育成することに努めることを理念とする。この理念の実現のために、少人数教育を基本とする教養教育および専門教育との適切な調和を考慮したきめ細かなカリキュラムによって、問題発見能力および多面的な分析能力の伸長を図ること、並びに言葉を通して形づくられた人間、歴史および社会の多様なあり方を考究し、共感を持って他者を理解する能力および自己を他者に正確に伝達する能力を涵養することによって、社会的な活動を自律的に展開するための基礎を構築することが学部の教育研究上の目的である。これら学部の理念・教育研究上の目的に即し、日本文学科としての具体的な教育研究上の目的（人材養成像）を次のように定める。</p> <p>（1）日本語および日本文学を学ぶことを通して、高度で柔軟な日本語運用力を身につけるとともに、日本人および日本文化についての幅広く体系的な教養および深い理解を獲得し、それらを社会生活において有効に活用しつつ、次の時代に受け渡すことのできる人材を養成する。</p> <p>（2）多様な国際社会の中で、自らの文化的特性に立脚しつつ自立的に行動できる基礎的な判断力および自らの思いを積極的に伝えることのできる豊かな表現力を備えた人材を養成する。</p> <p>これらの教育研究上の目的、人材養成像等をもとに、「専門分野の知識・技能の修得」「教養の修得」「課題の発見と解決」「表現力、発信力」「多様な人々との協働」「自発性、積極性」の各項目に関して、以下の基準に到達するように編成された教育課程において、所定の単位を修得した者に対して学士（文学）の学位を授与とするディプロマ・ポリシー【略】を定めている。</p>	②教員養成に対する理念・構想	<p>日本文学科では、高度で柔軟な日本語運用力、日本人および日本文化についての幅広く体系的な教養や深い理解を有し、多様化・国際化の時代の中で自立的に行動できる基礎的な判断力や豊かな表現力を備えた人材の育成を目的としている。その教育課程を生かし、日本語および日本文学についての専門的な理解・分析力を持ち、日本語表現の勘所を生徒にわかりやすく伝え、また考えさせる能力を身につけた教員を養成することを目標としている。</p>
文学部	日本文学科	③認定を受けようとする課程の設置趣旨（学科等ごと）	<p>○中学校一種免許状（国語）</p> <p>成蹊大学文学部は文化現象の総合的理解とその継承を教育・研究の目標としているが、その中で日本文学科は、日本語及び日本文学を学ぶことを通して、高度で柔軟な日本語運用力を身に付けるとともに、日本人及び日本文化についての幅広く体系的な教養及び深い理解を獲得し、それらを社会生活において有効に活用しつつ、次の時代に受け渡すことのできる人材の養成をめざしている。それは同時に、多様な国際社会の中で、自らの文化的特性に立脚しつつ自立的に行動できる基礎的な判断力及び自らの思いを積極的に伝えることのできる豊かな表現力を備えた人材を育成することでもある。このような人材は、社会のさまざまな領域での活躍が期待されるが、ことに教育という場合は、これらの資質が切実に要請される場であり、かつ存分にその資質を生かせる場でもある。したがって、教員養成に対する理念は特別なものではなく、学科の理念とそのまま重なっている。</p> <p>中学校一種免許状の取得課程においては、学習指導要領に記載されている「言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」の養成を若い世代に育てるため、教師自身が高度で柔軟な日本語運用力を身につけている必要がある。そのような日本語運用力は、学ぶこととともに、それを教えること、教師としての意識を持つことで最も高度に身につけることができる。そのような観点から、学科のカリキュラムと教職課程とが、相互に支え合うことで教育的効果を上げるべく構想され、運用されている。</p> <p>また、中学校において国語を指導する際に求められる日本語能力のためには、日本人や日本文化に対する体系的かつ正確な理解が必要と考えられる。古典文学、近現代文学、日本語学といった各分野をすべて学ばせるという学科カリキュラムは、そのような体系的な理解をめざしたものである。教員は、そのような知のありようを体現し、学習指導要領に言う「国語を尊重」する態度を若い世代に育てようとする職業である。教員を養成する課程の設置は学科の理念から自然に導き出されるものと言えよう。</p> <p>○高等学校一種免許状（国語）</p> <p>成蹊大学文学部は文化現象の総合的理解とその継承を教育・研究の目標としているが、その中で日本文学科は、日本語及び日本文学を学ぶことを通して、高度で柔軟な日本語運用力を身に付けるとともに、日本人及び日本文化についての幅広く体系的な教養及び深い理解を獲得し、それらを社会生活において有効に活用しつつ、次の時代に受け渡すことのできる人材の養成をめざしている。それは同時に、多様な国際社会の中で、自らの文化的特性に立脚しつつ自立的に行動できる基礎的な判断力及び自らの思いを積極的に伝えることのできる豊かな表現力を備えた人材を育成することでもある。このような人材は、社会のさまざまな領域での活躍が期待されるが、ことに教育という場合は、これらの資質が切実に要請される場であり、かつ存分にその資質を生かせる場でもある。したがって、教員養成に対する理念は特別なものではなく、学科の理念とそのまま重なっている。</p> <p>特に高等学校一種免許状の取得課程においては、学習指導要領に記載されている「言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」の養成を若い世代に育てるため、教師自身が、教師自身がより高度で柔軟な日本語運用力を身につけている必要がある。そのような日本語運用力は、学ぶこととともに、それを教えること、教師としての意識を持つことで最も高度に身につけることができる。そのような観点から、学科のカリキュラムと教職課程とが、相互に支え合うことで教育的効果を上げるべく構想され、運用されている。</p> <p>また、高等学校において国語を指導する際に求められる日本語能力のためには、日本人や日本文化に対するより体系的な教養と深い理解、文章を論理的に読解し、解釈し、それらを適切に表現することが必要になると考えられる。そのため、古典文学、近現代文学、日本語学といった各分野をすべて学ばせ、またすべての学年で演習を課すという学科カリキュラムは、そのような体系的な知の習得と思考力・表現力の養成とをめざしたもののだが、知の本質において、それは他者との相互理解や次世代への継承を希求する。教員は、そのような知のありようを体現し、学習指導要領に言う「国語を尊重」する態度を若い世代に育てようとする職業である。教員を養成する課程の設置は学科の理念から自然に導き出されるものと言えよう。</p>		

様式第7号ウ 本来は認定課程ごとに作成するものであるが、まずは基本としてまとめて作成。今後別々にしていく。

<文学部日本文学科> (認定課程: 中一種免(国語)、高一種免(国語))

(1) 各段階における到達目標

履修年次		到達目標
年次	時期	
1年次	前期	<p>前期では、教育の基礎的理解に関する科目においては、教師となるために必要な知識と内容を把握し、教育に関する基本的な概念や理論、子どもの発達と各発達段階における特徴とそれに応じた学習メカニズムと支援の方法、などについて学び、教職への関心・理解および進路としての意識付けが各自でできることを到達目標とする。</p> <p>教科に関する専門的事項および学科カリキュラムの履修においては、教科の各科目区分に定める授業科目のうち、一般的包括的内容を含んだ「書道」「日本文学研究の基礎」「日本語研究の基礎」や文学史の基礎となる「古典日本文学史」「近現代日本文学史」などといった科目を中心に履修し、教科に関する基礎的知識を習得することを到達目標とする。</p>
	後期	<p>後期では、前期に引き続き、教育の基礎的理解に関する科目においては、教育改革、教育諸問題、改訂教育基本法・学校教育法の要点を理解するとともに学校教育の今後に対する考察を行うための知識と能力を身につけ、生徒指導および進路指導の実践的能力を身につけることを到達目標とする。</p> <p>教科に関する専門的事項および学科カリキュラムの履修にあつては、前期に続き一般的包括的内容を含んだ「日本語法」や文学史の基礎となる「古典日本文学史」「近現代日本文学史」などといった科目を中心に履修し、教科に関する基礎的知識を習得することを目標とする。</p>
2年次	前期	<p>前期では、教育の基礎的理解に関する科目等においては、1年次の概論的な科目から各論に進んだ科目を履修する。具体的には、教育課程のあり方、指導案作成や教育方法、情報通信技術(ICT)を活用した教育、教育相談とカウンセリングに関する基礎的な知識と技法、特別支援教育の内容および役割などにの知識と基礎的技能を習得していることを到達目標とする。</p> <p>日本文学科では、2年次生全員に「古典文学基礎研究」「近現代文学基礎研究」「日本語学基礎研究」の3つの演習科目が1年間通しての必修として課され、国語の内実をなす各研究領域の方法論を確実に身につけることが、以後の学びに直結するこの段階での第一の目標である。</p> <p>それとともに、教科に関する専門的事項および学科カリキュラムの履修においては、1年次での概略的、一般的包括的内容の科目の不足を補いながら、2年次からは「日本語学講義」「各時代の日本文学講義」「漢文学にあたる科目」など、より専門性の高い学科開設科目をここから4年次までかけて履修し、徐々に教科の専門知識の肉付けをしていくことを目標とする。さらには、実践的な日本語表現・話し方、本学部で設置している日本語教員養成コースに規定される日本語教育方法についても学ぶことで、専門知識の実践的運用についても学んでいく。</p>
	後期	<p>後期では、教育の基礎的理解に関する科目等については、前期に引き続き、各論に進んだ科目を履修し、教育課程や授業を進める上での諸技法等を習得することを到達目標とする。また教科の指導法の履修が始まり、「国語科教育法Ⅰ」では、教科指導の基本的知識の習得を目標とするとともに、授業案の作成の手順を習得した上で模擬授業の準備を行っていくことがねらいとなる。</p> <p>教科に関する専門的事項および学科カリキュラムの履修においては、前期に引き続き基礎研究の3科目を確実に履修して総合的な国語力の基礎を身につけ、教科に関する専門的事項および学科カリキュラムの履修により教科の専門知識の肉付けを進めていくことが到達目標とする。</p>
	前期	<p>前期では、道徳、総合的学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目においては、模擬授業とその検討を通じて、道徳、総合的学習の時間や特別活動などの基本的な指導の在り方を身につけることを到達目標とする。また教科の指導法として履修する「国語科教育法Ⅱ」では、「国語科教育法Ⅰ」で習得した教科指導の基本的知識、授業案の作成手順をふまえて、模擬授業を行い、教育実習での教科指導の準備を行うことを到達目標とする。</p> <p>教科に関する専門的事項および学科カリキュラムの履修においては、2年次に記した科目の履修に加え、全員が「日本語学演習Ⅰ」または「日本文学演習Ⅰ」を履修することとなる。各演習でテキストや資料の分析、調査、立論、発表と討議を行うことを通して、国語の教員としても不可欠な日本語日本文学の専門的な探究方法と知識とを身につけることを目標とする。</p>

3年次	後期	<p>後期では、次年度の教育実習の準備としての科目である「教育実習論」を履修し、教育実習の意義と課題を確認し、心構え、態度、基礎知識、実情、判断力および話し方や板書といった実践技能を修得することを到達目標とする。また、「教職特論演習Ⅰ」の履修で、卒業後の教員採用を視野に入れ、これまで学んできた教職、教科のみならず教員として必要とされる幅広い知識を得ることもできるようにする。</p> <p>教科の指導法として履修する、「国語科教育法Ⅲ」では、教科指導の基本的知識、授業案の作成手順をふまえて、模擬授業を中心とした指導を行い、教科指導の準備をより確実なものとすることを目標とする。また中学校教員免許状取得の際の必修科目である「国語科教育法Ⅳ」では、国語科教育の担うべき役割や教科内容、教材研究や授業づくりの方法などの講義・演習を通して、特に中学校における国語科教育の在り方を学ぶ。</p> <p>教科に関する専門的事項および学科カリキュラムの履修においては、学科の専門科目の履修に加え、全員が「日本語学演習Ⅱ」または「日本文学演習Ⅱ」を履修することとなる。各演習でテキストや資料の分析、調査、立論、発表と討議を行うことを通して、国語の教員としても不可欠な日本語日本文学の専門的な探究方法と知識とを身につけることを目標とする。</p>
4年次	前期	<p>教育実習年度となり、「教育実習(中・高)」または「教育実習(高)」を履修する。この科目は、前年度後期の「教育実習論」に引き続き、教育実習の事前指導を受けたのち、実習校における実際の教育実習を行い、そして実習終了後の事後指導を受けることによって、学校教育を体験研究し、授業をはじめとする教員の基礎的な力量を身につけることを到達目標とする。</p> <p>教科に関する専門的事項および学科カリキュラムの履修においては、学科の専門科目の履修に加え、全員が「日本語学演習Ⅲ」または「日本文学演習Ⅲ」を履修し、国語の教員としても不可欠な日本語日本文学の専門的な知識と理解をさらに深めるとともに、必修科目である「卒業論文」に通年で取り組み、各自が、研究者、教育者としての核を作ることが目標となる。</p>
4年次	後期	<p>後期では、教職課程の集大成として「教職実践演習(中・高)」を履修する。これまでの教職課程の科目履修を振り返り、教員として必要な資質とは何かをもう一度問い直すことで、すでに備わっている事項と不足している事項を認識する。これにより、資質の高い教員をめざす力量を獲得することを到達目標とする。</p> <p>教科に関する専門的事項および学科カリキュラムの履修においては、全員が「日本語学演習Ⅳ」「日本文学演習Ⅳ」を履修して国語の教員としても不可欠な日本語日本文学の知識と理解をより深めるとともに、最終的に卒業および教員免許状取得に必要な科目を取得する。そして「卒業論文」を完成させることが最大の目標となる。卒業論文については、自らの達成を証明し、限界とあらたな課題を知るために口頭試問が行われ、学部での学びの最終的な目標となるとともに、教員としての資質も問うものとなっている。</p>

様式第7号ウ(教諭)

<文学部日本文学科>(認定課程:中一種免(国語)、高一種免(国語))

(2)具体的な履修カリキュラム

履修年次		具体的な科目名称						
		各教科の指導法に関する科目及び教育の基礎的理解に関する科目等			教科に関する専門的事項に関する科目	大学が独自に設定する科目	施行規則第66条の6に関する科目	その他教職課程に関連のある科目
年次	時期	科目区分	必要事項	科目名称				
1年次	前期	2	C	教職論	日本語・日本文学入門Ⅰ		College English (Listening & Speaking) Ⅰ	College English (Reading & Writing) Ⅰ
		2	B	教育原理	日本文学研究の基礎		情報基礎	日本語を正しく話す
		2	E	教育心理学	日本語研究の基礎			
					古典日本文学史A			
					日本語の歴史A			
	後期	2	D	学校と社会	日本語・日本文学入門Ⅱ		College English (Listening & Speaking) Ⅱ	College English (Reading & Writing) Ⅱ
		3	L	生徒指導論	日本語法		健康・スポーツ演習B	日本美術史B
		3	N	進路指導論	近現代日本文学史A		日本国憲法	
					日本語の歴史B			
					書道(書写を中心とする。)			
2年次	前期	2	F	特別支援教育概論	古典日本文学史B			College English (Integrated Skills) Ⅰ
		3	K	教育の方法と技術	近現代日本文学講義A			古典文学基礎研究Ⅰ
		3	M	教育相談	漢文基礎			近現代文学基礎研究Ⅰ
								日本語学基礎研究Ⅰ
								実践日本語表現
								応用日本語講座
	後期	2	G	教育課程論	近現代日本文学史B	学習指導と学校図書館		College English (Integrated Skills) Ⅱ
		3	R	ICT活用の理論と方法	近世日本文学講義B			古典文学基礎研究Ⅱ
				国語科教育法Ⅰ	中国文学史B			近現代文学基礎研究Ⅱ
								日本語学基礎研究Ⅱ
								実践話し方入門
								日本語教育の方法と技術
3年次	前期	3	I	総合的な学習の時間の指導法	古代日本文学講義A	学校経営と学校図書館		日本文学演習Ⅰまたは日本語学演習Ⅰ
		3	H	道德教育の指導法	中世日本文学講義A			古典に学ぶ日本語表現
		3	J	特別活動の指導法				日本民俗学A
				国語科教育法Ⅱ				創作講座(短歌)
	後期	4		教育実習論	古代日本文学講義B	教職特論演習Ⅰ		日本文学演習Ⅱまたは日本語学演習Ⅱ
				国語科教育法Ⅲ	近現代日本文学講義B	学校図書館メディアの構成		
				国語科教育法Ⅳ				

4年次	前期	4		教育実習(中・高)	日本語学講義A	教職特論演習Ⅱ		日本文学演習Ⅲまたは日本語学演習Ⅲ
						読書と豊かな人間性		卒業論文
	後期	4		教職実践演習(中・高)	日本語学講義B	情報メディアの活用		日本文学演習Ⅳまたは日本語学演習Ⅳ
		4						卒業論文